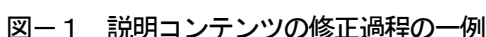


(財) 砂防・地すべり技術センター ○久保 勝太、安田 勇次、竹本 大昭、近藤 玲次
国土交通省四国山地砂防事務所 石塚 忠範(現 内閣府沖縄総合事務局開発建設部)
国土交通省四国山地砂防事務所 白川 勝、大谷 忠夫(現 国土交通省高知河川国道事務所)
国土交通省四国山地砂防事務所 新谷 大吾

そこで本研究では、一般住民が理解しにくいとされる水

反応調査は、水系砂防の土砂移動現象を生産、流出、流下、堆積等に段階分けしたものや、砂防施設の効果等につ



いて、説明内容を変えて複数作成し、住民が理解できない内容やその理由を直接対面形式のヒアリングにより行い、順次修正を行った。図－1に修正過程の一例を示す。

反応調査及び学識者の助言から明らかとなったことは主に下記の5つである。

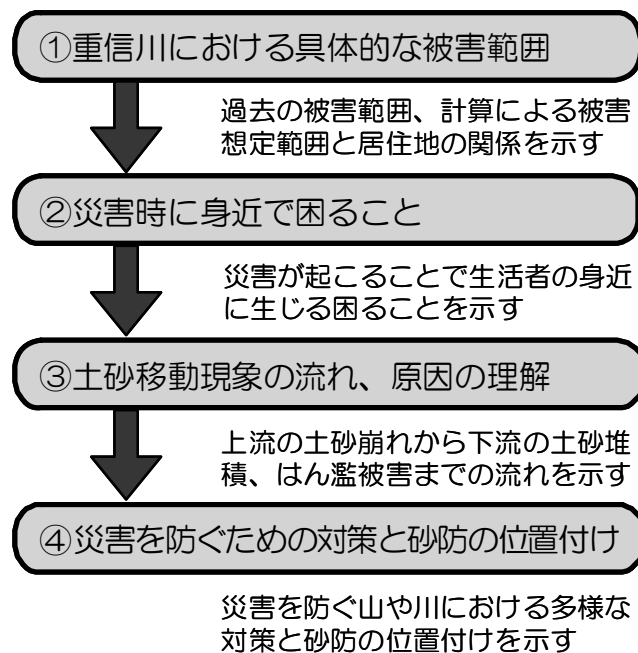
- ①1ページ当たりの情報量の多さが理解を妨げる
- ②理解させる内容が多岐にわたると受け付けない
- ③土砂移動現象を全て理解させるには限界がある
- ④イメージし易い身近な視点からの説明が必要
- ⑤対象によって理解の到達レベルが異なる

4. わかりやすい説明シナリオの検討について

反応調査及び学識者の助言に基づき、パンフレットを改善した。

- ①1ページで伝える内容を1つに絞るとともに、その表現方法は写真や漫画をできるだけ用いることで文章を減らし、情報量とともに見た目の圧迫感を軽減させた。
- ②当初、土砂移動現象の説明や砂防施設の機能、効果等、内容が多岐にわたっていたが、生活者の立場に立って、水系砂防を理解する上で最低限必要と考えられる内容に絞り込んだ。
- ③土砂移動現象の流れについては、的を絞った現象を写真により、上流、中流、下流といった川の流れと合わせて上から順に配置した。また、現象が生じる過程について、漫画で簡略化して説明した。
- ④当事者意識が持てるように、自分の家が安全かどうかという視点から、実際の流域内での過去災害実績やはん濫計算による浸水範囲等と、読み手の居住地との位置関係を示すとともに、災害時に生じる身近な弊害（例えば車が使えなくなる、清掃活動が大変等）を示した。
- ⑤パンフレットについては、水系砂防を知らない住民を対象とした簡単な説明内容とした。もともと知識がある住民や、このパンフレットに興味をもった住民に対しては、より知識が深められるように、事務所のHPアドレスを示し、さらに学習できるようにした。

上記の改善の結果、図－2に示すような説明シナリオとした。説明シナリオの順番については、住民の身近な視点を最優先し、想定被害範囲と災害時に身近で困ることを最初に配置する構成とした。これは、反応調査において、川の側に住んでいる多くの住民が、漠然と自分の家は安全だと思っており、災害に対しての当事者意識が低いことが明らかとなったため、このような住民に対し、まず、一番関心のある自分の家との位置関係を示すことで、直感的に興味を引きつけ、身近な困ることを示して当事者意識を直感的に持つようにしたものである。



図－2 わかりやすい説明シナリオの概要

5. おわりに

本研究により、説明手法として作成したパンフレットにおける重要なポイントは、以下の3つである。

- ①読み手にとって適切な情報量を設定すること
- ②住民にとって身近な視点から説明すること
- ③対象によって理解の到達レベルが異なること

なお、①②のポイントを踏まえたパンフレットを用い、対面形式のヒアリングを行った住民に対して反応調査を実施した結果、32名中30名が分かり易くなったと答えた。

主な理由としては、情報量が減って一目で分かり易くなったことが挙げられた。ただし、分かり易くなったという回答の中には、前回理解したのでよく分かったという意見もあり、今後は、初めて見る住民に対して検証が必要と考えられる。

また、難しくなったと答えた2名の住民は、施設の機能や効果等の詳細がなくなったことを理由に挙げていた。この住民は、防災関係に携わっており、他の住民に比べ、砂防事業に関する知識が高く、物足りなさを感じるなど③のポイントを示す結果も得られた。今後は、このような知識が高い住民に対しては、HPアドレスの掲載のような知識を深める方法を載せるだけでなく、知識が高い住民向けのパンフレットの作成等が必要である。

謝辞

本研究にあたり、数々のご指導、ご協力を賜った東京大学 大学院情報学環 総合防災情報研究センターの田中淳教授並びに須見特任教授に対し、ここに心から感謝の意を表する次第である。